

ひきこもり、就労支援の前に必要なこと 生きてもいいと思えない人へ

有料記事

田淵紫織 2023年5月5日 20時00分

コメントプラス

杉田菜穂さんのコメント



ひきこもりの当事者団体「ウィークタイ」の拠点には、当事者が泊まることのできる部屋も用意している=2023年4月19日、大阪府豊中市



大人のひきこもり当事者のサポートに向け、多くの団体や自治体は就労支援を掲げています。一方、NPO法人「ウィークタイ」(大阪府吹田市)は、「居住支援」を始めました。なぜでしょうか。

【ルポ】ひきこもって34年、親を亡くした後 記者に届いた2枚の喪中はがき →

【関連】ひきこもり、家族任せは「とっくに限界」 制度改革訴える社会学者 →

「実家で寝るよりもぐっすり眠れました」。4月中旬の朝、大阪府豊中市の民家に泊まった男性(48)は、同NPO代表理事の泉翔さん(36)にそう

話した。

この民家は同NPOが当事者用のシェルターとして運営している。3部屋に計5人が寝泊まりできる。現在は試験段階で、今夏から本格的に運用を始めるといふ。

同NPOが開く当事者の集まりに来る人は、たいてい同居家族がいる。しかし、家族との関係が悪い人も少なくない。コロナ禍で家族の外出も控えられた。「せつかくNPOや行政の支援を受けて少し元気になっても、家に帰ると再び精神状態が悪化したケースがありました」と泉さん。

泉さんの活動の原点には、不登校だった学生時代の仲間たちの窮状がありました。記事後半では、当事者の「生きてもいいと思えないという苦しみ」について語ります

「このままだと自分が死ぬか家族に手を上げるかしてしまう」という話も聞いた。「家より楽になるなら、泊まっていったら？」と声をかけられるよう、こうした宿泊拠点を設けたという。

泉さんによると、ひきこもり当事者は、地元である当事者会には近所の目もあって足を運びにくい傾向がある。同NPOが開催する集まりには、県外から電車やバスを乗り継いで、やっとの思いで来てくれる人もいるという。「泊まる選択肢が用意できれば、地域を超えてつながることができます」

滋賀県草津市の辰巳将貴さん(22)は、1カ月に1度のペースでシェルターに泊まる。不登校だった学生時代から断続的にひきこもってきた。1年半前から同NPOのイベントに参加し、今では企画にも携わる。自宅から片道2時間超かかるが、「ここに泊まる時は、リュックを下ろして当事者どうしじっくり話せます」。自身の親との関係は悪くないが、家族関係に問題を抱えている当事者仲間は多いという。「家を出たいけれどその選択肢がない人にとっても、外に出るきっかけになるかもしれない」

大阪府に住む冒頭の男性も、毎月泊まる。大学生の時から計15年ほどひきこもった経験がある。8年ほど前に泉さんと知り合い、たまに活動も手伝う。「一緒に宿泊して時間をともにし、お互いに素の自分が出ることで、人に少しずつ慣れていけるのでは」

泉さんの活動の原点は、10代の頃にある。中学時代は不登校で、その後、通信制高校のサポート校制度で大阪の予備校に入った。そこで出会った気の合う仲間どうしで下宿先に集まるようになった。不登校だった人、ひきこもっていた人、家族関係が悪く家にいられなくなっている人、地元の親たちから過度な期待をかけられていられなくなって大阪に出てきた人などがいた。

原点は、予備校仲間たちの切実さ

泉さん自身は3年後に大学に進学。だんだんその集まりに顔を出さなくなっていた20歳の頃、仲間のうちの一人が自ら命を絶った。

久しぶりに会った友人たちは、「大半がまた独りぼっちになっていて、ひきこもっている人も多かった」。母親に激しいDV(家庭内暴力)をしてしまい、措置入院になったという話も聞いた。それに対して、「ひとごととは思えない」と話した仲間もいた。

また皆で集まり始めた。とはいえ、話したりご飯を食べたりするだけ。「どうせ集まるなら何人増えても変わらない」と、誰でもどうぞとオンライン上でも呼びかけて開いていると、全国各地から当事者が参加してくれるようになった。「たむろできる場所で何となく一緒にいたら、それだけで元気になることがある。『これやな』と思いました」

当初は集まる場所がなく、公民館を定期的に借りた。現在の支援拠点に移ってからも、ご飯をつくって食べる「もぐもぐ集会」や誰でも参加できる「だらだら集会」、人間関係のきっかけにするための「ボードゲームで遊ぶ会」などを開く。「ひきこもっている部屋のドアを無理に開けようとするより、ドアの前で踊った方がいい。喜びや楽しみの気配があるから道が開けて、外に出て来られるのではないですか」

「生きていいに決まってる」

行政や多くの支援団体の就労支援のトレーニングなどを見ていて、泉さんは「当事者は働きたいと思っていない」ということが前提となっているように感じることもある。「でも、僕の経験則から言えば、居場所でいったん元気になった人はほぼ自分から働きます。生きていくためにも余暇のためにも、先立つものは必要ですから」。ハローワークに行ったり、履歴書を書いて単発のバイトに申し込んだりする姿を見てきた。

しかし、そうなる前に心身を壊してしまったり、命を絶ってしまったりする当事者たちもいる。「自分が生きてもいいと思えない苦しみがずっと続いているから」とみる。「生きていいに決まってるんですよ」

泉さん自身、うつ病で障害者手帳を持つ。一昨年に免疫の病気にかかり、それまで飲んでいた抗不安薬が飲めない体になった。

「当事者どうし理解しあえることもしあえないこともある。人間どうですかから居場所作りはきれいな面ばかりではありません。でも、困難な時、誰かが自分を尊重してくれて隣にいてくれることはある。就労支援だけではない、こうした部分に目を向けてほしいと切に思います」(田淵紫織)

石川良子・松山大教授(社会学)の話

ひきこもり当事者の支援には、就労支援が最上位であるようなヒエラルキーがあり、疑問を感じる。就労支援が直ちに悪いわけではないが、当事者の多くはそもそも『生きる』ということが揺らいでいる。社会や自身の常識を押しつけていないか常に点検し、本人が何に苦しんでいるのかを知ろうとすることなくして、支援は成り立たない。

ひきこもり当事者や家族の相談先

【ひきこもり地域支援センター】

全都道府県と政令指定市にある。社会福祉士や臨床心理士らに、電話や面接で相談できる

【KHJ全国ひきこもり家族会連合会】

ホームページ(<https://www.khj-h.com>)に、全国の家族会の連絡先一覧がある

【ひきこもりUX会議】

ホームページ(<https://uxkaigijp/>)で、全国各地で開く当事者向けの「女子会」などを紹介

コメントプラス

いま注目のコメントを見る>



杉田菜穂 (俳人・大阪公立大学教授＝社会政策) 2023年5月5日20時0分 投稿

【視点】「困難な時、誰かが自分を尊重してくれて隣にいてくれることで救われることはある」と。緩く誰かにつながる止まり木のような場所は、自分らしく生きる環境が整っている場所だ。そんな場所に救われた人、日ごろからそんな場所で過ごす時間を大切にしている人は意外と多い。次のような状況を指摘すれば、この記事にあるような居場所作りの社会的な意義の大きさが伝わるだろうか。

・制度や分野別の縦割り／横並び行政を超えた包括的支援体制が確立できていないと、状況に応じた柔軟な対応で孤立している人を他者や社会とつなぎ直す支援はできない。

・「まずは自分でなんとかしなければならない」「まずは家族でなんとかしなければならない」と思い込ませる社会が変わらないと、社会的に孤立する人が増える。

・家族の変化と雇用システムの変化によってあらゆるつながりが弱体化しており、多くの人が生きていく基盤となる居場所や役割を得られなくなる不安を抱えている。

NEW



コメントへの感想をお寄せください



朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.